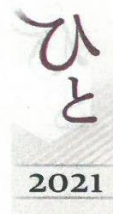


余録

伊能忠敬は55歳で日本地図作製のために全国を回る測量の旅に出た。全盲の学者、塙保己一が「群書類従」666冊を完成させたのは74歳。葛飾北斎の絶筆ともされる「富士越龍」は89歳の作という。高齢社会の現代から考えても頭が下がる▲20歳で被爆した坪井直さんは60歳で教員を退職する際に「あなたは平和教育から逃げちゃいかん」と言われ、広島被爆者団体役員を引き受けた。「ピカドン先生」を名乗って生徒に体験を語ってきたが、本格的な運動に取り組んだのはそれからだった▲20カ国以上を回り、核廃絶を訴えた。2005年の核拡散防止条約(NPT)再検討会議の際、ニューヨークで4万人デモの先頭に立った時が79歳。5年後にも「最後かもしれない」という決意で渡米した▲「トンネルの向こうに明かり」を見たのはオバマ米大統領が「核兵器のない世界」に言及した09年プラハ演説。以来、広島訪問を訴える手紙を出し続けた。16年に広島を訪れたオバマ氏には「91歳の被爆者である坪井直です」と語りかけた▲広島の高校生らが被爆や運動の体験を聞いて4年前に冊子「にんげん坪井直魂の叫び」を作った。「あなたがたが私に聞いたことを誰かに話す。それが一番大事」という言葉に思いがこもる▲きょうは総選挙の投票とハロウィーンが重なった。元々は大騒ぎと無縁の鎮魂の行事である。96歳で亡くなるまで「ネバーギブアップ」を買った坪井さん。その精神を受け継ぐことが鎮魂の道だろう。 2021・10・31



今春、首都圏から核廃絶を目指す学生団体「KNOW NUKES TOKYO(ノークエストトーキョー)」を設立し、共同代表に就いた。1月に発効したが日本は参加していない核兵器禁止条約について、国会議員から賛否を聞き取り、インターネットで発信する「議員面会プロジェクト」などを進めている。

活動の原点は出身地・広島県福山市の益進中・高で所属した「ヒューマンライツ部」。多くの被爆者と交流し、24日に死去した日本原水爆被害者団体協議会代表委員の坪井直さんの半生を冊子にしたこともある。絶望を経験しながらも優しく接してくれる被爆者たちに「『いつか核なき世界が来る』という希望を持って生きる彼らの力になりたい」と思った。



核廃絶を目指す学生団体を設立

たかはし ゆうた
高橋 悠太さん

会議員に核禁止条約への意見を聞く活動を始めた。慶応大に進学し上京した後も、関わり続けてきた。

米国の「核の傘」に依存する日本では、議員の関心は低いと感じる。大学では友人に「核廃絶は夢物語」と言われた。「難しいことは理解しているけど、核抑止論で思考停止してはいけない。条約参加は、被爆国として世界から望まれている選択だと伝えたい」

新団体の目標は「ボランティア」と見なされがちな平和活動を通して利益を生み出し、大学卒業後も継続できる場をつくることだ。大学では政治学を専攻。趣味は料理。「頭の中の7割は核問題」の21歳。(共同)

※共同通信の記事ですから全国の地方(ブロック)新聞が随時、掲載することでしょう。